

黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.92 (March 31, 2022)

第92号 2022年3月31日

例会発表要旨

10月例会 2021年10月23日 オンライン開催 (Zoom)

- ① 移動と旅におけるレイシズム: 映画『グリーンブック』と『ゲット・アウト』をめぐって
柴崎 小百合 (城西国際大学)

黒人はアメリカ映画が紡ぐ壮大な移動や旅の物語から長らく排除されてきた。特にハリウッドのロードムービーでは、旅する主体は白人のものだった。本発表では、旅や移動をする黒人の物語が描かれた映画である、ピーター・ファレリー (Peter Farrelly) 監督の『グリーンブック』(*Green Book*, 2018) とジョーダン・ピール (Jordan Peele) 監督の『ゲット・アウト』(*Get Out*, 2017) をロードムービーと位置づけ、これらの作品で黒人の移動と旅というテーマとレイシズムがいかに表象されているかを検討した。

前半では、サンダウンタウン (Sundown Town) と呼ばれた、日没後の黒人の滞在を禁じ、黒人の移動や旅の大きな障害となった町や、黒人旅行のバイブルと呼ばれた『ニグロ・モータリスト・グリーン・ブック』(*The Negro Motorist Green Book*) が果たした役割を検討し、移動や旅が歴史的に黒人にとっていかに困難だったかを概観した。

後半では映画の領域に移り、ロードムービーでいかにレイシズムが扱われているかについて検討した。『グリーンブック』は人種融和を高らかに謳っており、そこには、アメリカはすでにレイシズムを克服した、とするポスト・レイシャルの神話が見てとれると指摘した。一方『ゲット・アウト』は、レイシズムは決して過去のものではないと断じており、その物語が奴隷制度のアレゴリーとなっていると考察した。ピール監督は、映画という装置を使い、主人公の眼差しを通じて観客に現代の奴隷制の恐怖を体験させることで、黒人が日々直面するアメリカのレイシズムの狂気をわれわれに突き付けていると説明した。

② 『テンペスト』と『タール・ベイビー』——黒いミランダ——

福島 昇(元日本大学)

ジェイディーンは《ファーディナンド》を見つけることはできなかった。モリスンは同化主義と民族主義の狭間で葛藤する黒いミランダを描こうとしたのではない。

サンとジェイディーンは互いに強い絆で結ばれたように思えた。しかし、二人は育った環境が余りに異なり仲違いする。サンはジェイディーンに「問題はヴァレリアンではない。問題はおれだ。解決してもらいたい」とは言うものの、黒人性に執着する。一方、ジェイディーンはマーガレットが彼女の帰るべき所は「ヨーロッパ。未来。世界」であると言うように、サンへの思いを引きずりながらリックが住むヨーロッパへ向かう。ジェイディーンにとって、ファーディナンドは一体誰なのか。リックなのか。ミランダとファーディナンドのように、たとえジェイディーンとリックが結婚するとしても、小説はハッピーエンドにはならない。彼女がサンを忘れられるはずがないからだ。モリスンは「私は『タール・ベイビー』のハッピーエンドを願っていました。しかし、私にとっては、それよりもっと重要なことがあります。それは、そもそも何が難しいのかを探ることです」と語っている。モリスンは人種問題の難しさ、根深さを探っているのだ。

『テンペスト』と『タール・ベイビー』は黒人と白人が互いに激しく葛藤し対立する様を描きながら、その関係の困難性に光を当てることにより、マイノリティーに対する通俗的・社会的な表象の呪縛の強さを改めて示している。また、ミランダとジェイディーンに見られるように教育の重要性について論争を巻き起こしたとも言える。

③ 続・続「ボーダーを越境するダイアログ」 —小説 *When the Village Sleeps* (Sindiwe Magona, 2021) 、コロナ禍の世界に警鐘—

佐竹 純子(元プール学院短期大学)

2021年刊行のシンディウェ・マゴナによる小説 *When the Village Sleeps* は、現今の新型コロナ危機の中で、過去にコミュニティが経験した危機をとらえ直す可能性を提起する。マゴナの最初の小説『母から母へ』(1998年、邦訳2002年)にはアパルトヘイト末期の暴力的な状況下で「ウブントウ(人間性)は逃げ去ってしまった」とあった。本作では21世紀の南アフリカ社会における「ウブントウの死」が嘆かれる。発表ではウブントウの意味を理解する上で重要な3点を論じた。

第1に少女の「力」。少女は先天性肢体不自由児で、曾祖母の影響で野菜作りが得意で、予知能力がある。第2に先人たちの声。先人とは、コーサ文学の先駆者や、主人公である女性4代の先祖である。先人の声は彼女らを「ウブントウ」へと導こうとする。両者を取りもつ役割を担うのが4代目の少女だ。第3に菜園活動の意味。障がい児を対象とするキャンプに参加した少女は、仲間の子どもたちと共に貧しい都市部で食料確保のための菜園活動を始める。活動は世代や地域をこえて広がる。そんな矢先にコロナ危機が襲った。

感染症と社会改革との関係は本作以前のマゴナ作品においても様々な形で描きまわってきた。「牛殺し」で知られる19世紀の事件は一般的にコーサ人の歴史の中の汚点として理解される。しかし背景にある牛肺疫の蔓延や白人による土地収奪を注視することで「牛殺し」の読み直しができる。結論としてマゴナの小説に負の記憶を社会変革へと転換する可能性を読み取れると論じた。鍵となるウブントウの意味については今後引き続き考察していきたい。

① Sexuality in Toni Morrison's *The Bluest Eye* and *God Help the Child*

王 玲玲 (大阪市立大学)

African American women have a history of being sexually exploited in the days of slavery and after the emancipation. Sexual harassment and exploitation are still problems. By addressing this issue in *The Bluest Eye* (1970), Morrison shed light on what has been and still is a taboo in African American society. The three prostitutes in *The Bluest Eye* are different from other characters in the novel in that they hate all men regardless of their skin color. While other women are restricted by the rules of white-dominated and patriarchal society, these prostitutes set themselves free by seizing the initiative in sex. Morrison makes it clear that these women break with the classical stereotype of the ideal prostitute. Although Morrison describes them negatively in words like gargoyles and harridans, she clarifies that they are happy. In *God Help the Child* (2015), Morrison's narration reflected black women's condition in the contemporary America. The concept of new blacks in the post-racial era has sexual and erotic aspects. It enhances the image of the black subject as a sex appeal. In this novel, Lula Ann Bridewell, also known as Bride, represents the new black people. Morrison used Bride to redefine black identities, especially female sexuality and economic success in the contemporary America. Bride's blackness functions as a commodity depending on what adorns her body rather than an inherent value within it. Bride's celebration of her sexuality is a kind of hidden power resource, which is the core of Morrison's construction of the new blacks. A half-century has passed since the 1940s, America has become a multicultural and multiracial country. Black women are no longer sitting at the bottom of society. Therefore, in the contemporary America, interaction should be considered in assessing black women's sexuality. Morrison attacked the male patriarchy, which abuses the females sexually and mentally in the two novels. She showed how women in general and black women in particular become the victims of males' sexual desire. However, they are no longer the victims in cases, both of the three whores and of Bride. This presentation focuses on the sexuality of the three prostitutes' in *The Bluest Eye* and Bride in *God Help the Child* and analyzes how the changing times affect black women's social status and sexuality.

② Using the Spoken Words and Wisdom of James Baldwin to Critique the Media Furor over Teaching Critical Race Theory in American Schools

Garcia Chambers (白百合女子大学)

This presentation aims to channel a Baldwinian perspective on the current media controversy surrounding teaching CRT in US schools. Proponents of the teaching of CRT argue that the effort is not all new, but rather and simply a more focused and widespread

dialogue in classrooms on the issues of race, the debilitating cost of racism to all Americans, and the reality of institutional racism. This intensification and expansion of CRT curriculum resulted in no small measure from the campaign to promote diversity and the clarion call of the BLM. Those opposing CRT view its teaching as bad for America as it will result in white students feeling guilty for the past wrongs of their ancestors and hating themselves. Is this anti-CRT campaign, however, a mere Right-wing media campaign? And what is all this fuss about what seems to be harmless and truth-telling lessons being added to the curriculum? Puzzled, I stumbled upon Baldwin.

Channeling Baldwin, I view the teaching of CRT as a necessary truth-telling exercise that has a significant potential to expose the *big lie*; I view the teaching of CRT as a necessary truth-telling exercise for White America to come grips with America's existential crisis, that until they confront the *big lie* that permeates every fabric of the American society, America's dream of a lasting peace and prosperity, and a post-racial society will remain but a 'fleeting illusion to be pursued but never attained.' Furthermore, if 'ignorance enslaves, but knowledge liberates,' CRT can then be seen as a liberation project. This thesis is informed by my sense of James Baldwin's views, understanding, and clarity of thought on White America, and the *big lie*. I will argue that Baldwin would see the medium of formal education as a powerful space within which to significantly advance the liberation project. Yet, the presentation will show Baldwin to be clear-eyed, realistic, perceptive, dialectical, and some would say prophetic in his discourse on defeating the monstrosity of this *big lie*. In reading Baldwin, I have developed some clarity on the current CRT controversy and much more, which I hope to share in this conversation-like presentation.

③ *Sing, Unburied, Sing* における幽霊たちのポリフォニー

山本 直子(龍谷大学)

発表では、トニ・モリスンの小説 *Beloved* (1987) と比較しながら、ジェスミン・ウォードの小説 *Sing, Unburied, Sing* (2017) においてアフリカ系アメリカ人の物語がどのように語られているのか考察した。両作品は子殺しと過去の幽霊というテーマを共有している。

Beloved が出版されてから 30 年後、ブラック・ライブズ・マター運動が興隆する時期に、「新しいトニ・モリソン」と称されるウォードは命の尊さを伝える *Sing, Unburied, Sing* を世に送り出した。弟をはじめ、事件や事故の被害者となった人々の死を悼み、自分たちの物語を語るために作家となったウォードの作品には、暴力や差別に苦しみ、死後も幽霊となって彷徨い続ける人々が登場する。

Beloved で、母に殺害された娘の声が、奴隷制の犠牲になった他の黒人女性たちの声と溶け合ってポリフォニーとなるように、*Sing, Unburied, Sing* では、奴隷制時代から継承されている人種主義の犠牲者たちが苦難の人生について語る声が融合してポリフォニーとなる。幽霊たちの声は微かな痕跡としてしか残らないが、後に残された者たちはその囁きに耳を澄まし、沈黙の物語を歴史の闇から掬い上げなければならない。このメッセージこそが、アフリカ系アメリカ人の物語を紡ぐことを受け継いだウォードからモリソンへの応答であると言える。

会員からの投稿

Rita Keegan 展(南ロンドン美術館)参加と、図録／論集 *Mirror Reflecting Darkly* の刊行

萩原 弘子(大阪府立大)

2021 年秋、南ロンドン美術館(South London Gallery: SLG)で開催された *Rita Keegan: Somewhere Between There and Here* 展にアーティストでもないのに参加した。¹リタ・キーガン(1949 年生まれ)とは、1990 年刊行の拙著『この胸の嵐—英国ブラック女性アーティストは語る』(現代企画室)に協力してもらって以来の交流だ。この展覧会はキーガンの代表作に新作を加えた集大成展であり、SLG のメイン展示室に置かれたインスタレーション作品が私も参加した *Social Fabric* である。

色とりどりのパッチワークを黒地の布で繋いで仕立てたロング・コートが作品中央に屹立している。コート裾あたりにあるA4判のパッチワークが、コロナ禍で厳しい郵便事情のなかを空輸された私の“social fabric”である。小学校の家庭科で染めたハンカチ、ロンドンで使っていたアフリカ産藍染のベッド・リネン、大阪の書齋で使ったインド産捺染の卓布、フィリピン産のバイナップル繊維製スカーフなど、切手サイズに切った約 50 片のパッチは半世紀以上にわたる思い出の切れ端だ。他のパッチワークもキーガンと交流のある友人、知人たちの作成したものと聞く。展覧会に先立って協力キュレーターたちと sewing bee を催し、パッチワークを縫いあわせてコートを仕上げる様子は、Rita Keegan Archive Project (後述)ウェブサイトのブログに写真入りで報告されている。²

黒いコートの周辺ぐるりには、天井からいくつものダングラーが吊り下げられている。それらは新大陸、特に北アメリカの奴隷制に関連の古い図像が多い。たとえば奴隷船が渡った大西洋の図、逃亡奴隷の処罰に使われた拘束具の版画などである。コート周囲の床には、胡椒、ナツメグなどのスパイスが撒かれている。ロンドン訪問ができないため、作品についてわかることといえば、キーガンがしてくれた話や美術館ウェブサイトにある情報などから、この程度である。

カリブ諸島、カナダ出身の両親のもとにニューヨークで生まれ育ったキーガンは、1980年に渡英。1980～90年代のブラック・アート運動の一郭を担う重要なアーティストとなった。彼女自身の着る服がいつも非凡で洒落ていて、有名ミュージシャンのステージ衣装担当で知られる、ファッションの人でもある。SLG 展示室の中央に、黒く華やかで大きなコートで立つのはキーガン自身だろう。新世界奴隷制、香料貿易、友人たち、そして凝った衣装への言及がある作品 *Social Fabric* はおそらく、キーガンの過去と現在をつくりだしたもの、支えてきたものを形象化した表現と思われる。

¹ 同展開催は 2021 年 9 月 17 日～11 月 28 日。詳細は、South London Gallery のウェブサイトにある Past Exhibitions & Events の頁を参照。

² Rita Keegan Archive Project のウェブサイト参照。Accessed January 10, 2022, <https://ritakeeganarchiveproject.com/2021/11/23/curating-with-care-a-reflection-on-working-with-the-rita-keegan-archive-project/>.



Rita Keegan, *Trophies Revised*, detail, 2021
Courtesy the artist
Installation view at the South London Gallery
Photo: Andy Stagg

展覧会開催と同時に刊行された *Mirror Reflecting Darkly* (Goldsmiths Press)は展覧会図録ではあるが、敢えて別タイトルにしてあることでわかるように、図録というに留まらない論集として編まれた。論集のタイトルは、1980年代後半にロンドン南のブリクストンを中心に活動したブラック女性アーティストたちの展覧会タイトルから採られている。SLG 展開催のそもそもの契機は、キーガンが 1980年代から収集してきたブラック・アート運動関連の資料を、ゴールドスミス・カレッジが Rita Keegan Archive として所蔵を決めたことに始まる。宝くじ資金で助成されて、アーカイヴ整備に必要な人件費も出るようになった。

私自身、ブラック・アート運動研究のためにロンドン中心地に仕事場を設けて、30年にわたるロンドン通いで自分用のアーカイヴ構築に多大な労力を費やしてきた。*Mirror Reflecting Darkly* はアーカイヴに関する論集としても機能するように計画されていたので、私のような遠来の研究者にも寄稿の声がかかったのだろう。

「ブラック・アート」という概念、それを掲げる展覧会は、いずれも 1980年代初頭から 15年の時を経て変化し、篡奪や取り込み、抵抗や再興の試みがあって、単純な議論ではすまない。

議論については近日刊の拙著に譲るとして、³ *Mirror Reflecting Darkly* に寄稿した拙稿は“Recollections as a Constant Observer from Another Fallen Empire”と題し、自分用のアーカイヴ構築をするしかなかった数十年前からの研究歴をふりかえっている。15 年間に開催されたブラック・アート展は控えめに数えても 100 を超え、参加アーティスト延べ人数は 750 人ほどと、驚くべき集中度合いである。しかし当初は多くの場合、展覧会図録はなく、プレス用のプリントとポスターを作成するくらいだった。資料がなければ展覧会はなかったも同然で、歴史に記述されないままとなる。キーガンが根気よく収集した資料が貴重なのは、展覧会終了とともに捨てられてしまうようなガリ版刷りプリントなどの“ephemerae”資料を含むことだ。1980 年代に大ロンドン議会 (Greater London Council: GLC) が行なったマイノリティへの文化助成は前例のないことで、そのおかげで多くの展覧会が開催された。1986 年に GLC が廃止されてからは芸術評議会がマイノリティへの主たる助成者となるが、事態が大きく変わることはなかった。助成はあくまでもエスニック・マイノリティ支援の枠組みのなかで行なわれ、芸術助成の本丸から支出されたわけではなかった。したがって助成は一過性で、およそ潤沢でも体系的でもなく、アーティストの意向よりも文化行政の政策方針 (主になんらかの多元主義) が優先された。結局、1990 年代に入っても今後の研究に向けた持続的なアーカイヴは実現しなかった。ゴールドスミス・カレッジに資料室ができていま、アーカイヴと人種という問題を真剣に考えてみるべきだと思っている。

実は SLG ではキーガン個展に先行する 1 年近くの期間、キーガン資料室所蔵のコレクションの一部が展示されていた。 *The Rita Keegan Archive (Project)*⁴ と題されたその展示と、このたびのキーガン展を併せての展評が *Observer* 紙に出た (2021 年 9 月 11 日)。記者は高評価のつもりらしいが、その記事は“The Return of Black British Art’s Forgotten Pioneer”という見出しからして間違いとバイアスのてんこ盛りだ(「帰還」「忘れられた」「パイオニア」としている点)。そこには芸術表現、人種主義、歴史記述とアーカイヴ構築に関わる重要問題が含まれる。いずれ機会を改めて論じたい。

*図版キャプションについて

作品図版のキャプションは著作権者である SLG の指示どおりにしている。パッチ作成協力者には作品タイトル *Social Fabric* と連絡されてきたが、SLG 提供のキャプションでは *Trophies Revised* となっている。詳細は不明だが、まちがいないのは“trophies”が 1994 年開催のブラック・アーティスト作品展 *Trophies of Empire* (リヴァプール) を参照先としていることだ。同展でのキーガン作品にも奴隷制、香料貿易への言及があった。それから四半世紀を経て制作した改訂版が今回の作品であることが、SLG のキャプションからわかる。

³ 萩原弘子『展覧会の政治学と「ブラック・アート」言説—1980 年代英国「ブラック・アート」運動の研究』(すずさわ書店、近日刊)。

⁴ 同展は 2020 年 2 月 25 日～2021 年 1 月 3 日に開催された。

<著書紹介>

追立祐嗣 『アメリカ黒人文学と現代沖縄文学を読む』大阪教育図書、2022年2月25日刊行

追立祐嗣(沖縄国際大学)

(本書「はしがき」より。一部加筆修正あり。)

今から5年前に、私は『ビガー・トーマスとは何者か——「アメリカの息子」とその周辺に関する論集』(大阪教育図書、2017年)を出版した。私の専門分野は、アメリカ黒人文学であるが、その中でも「専門中の専門」として研究を行っているのが、リチャード・ライトという作家であり、とりわけその代表作『アメリカの息子』である。しかし、私には、それと並行してもう一つ中心的に研究を行っている分野がある。それが、本書で扱う「アメリカ黒人文学と現代沖縄文学との比較考察」である。

アメリカ黒人文学の主要なテーマとしては、恐怖、怒り、二重意識(仮面性)、痛みと癒し、死者との語りなどが挙げられるが、現代沖縄文学の作品に関しても、同様のテーマを扱った作品が多く、同じ「被差別民族」としての類似性だけでは推し量れないほどに、両者には驚くべき共通点が見られる。

今回、本書においては、これまで私が沖縄国際大学で研究・教育を行ってきたアメリカ黒人文学の作品の中から8作品を選び、同時に、現代沖縄文学の中から4作品を取り挙げ、比較考察の論考を行った。

扱った作品は、次の通りである。

- ・リチャード・ライト「黒人差別の中で生きる知恵」
- ・ラングストン・ヒューズ「教授」
- ・大城立裕「カクテル・パーティー」(芥川賞受賞作品)
- ・ラングストン・ヒューズ「ある金曜日の朝」
- ・リチャード・ライト「河のほとり」
- ・ジェイムズ・ボールドウィン「サニーのブルース」
- ・ラルフ・エリスン「帰郷」
- ・又吉栄喜「豚の報い」(芥川賞受賞作品)
- ・マルコムX「サタン」(『マルコムX自伝』より)
- ・アリス・ウォーカー「普段使い」
- ・知念正真「人類館」(岸田國士戯曲賞受賞作品)
- ・目取真俊「水滴」(芥川賞受賞作品)

本書の各章で取り挙げた作品については、出来得る限り多くの読者に読んで頂くために、日頃私が「講義」を行う際に学生に向かって「語りかける」ような形式にした。従って、各章の題名は「第一講～第十五講」とし、文末表現には、「です、ます」調を用いた。また、可能な限り英語を日本語に訳して引用などを行っている。

また、本文中の三カ所に、「関連論文」として、これまでに私が学会誌や論集などに発表した論文の中から、アメリカ黒人文学と現代沖縄文学の共通点を論じたものを掲載している。

- ・関連論文①:「教授」と「カクテル・パーティー」の比較考察

- ・関連論文②:「帰郷」と「豚の報い」の比較考察
- ・関連論文③:目取真俊「水滴」とトニ・モリスン『ビラヴド』の比較考察

関連論文には、各章の本文と重複する部分が多々あると思われるが、発表した内容のまま掲載することにした。(文末表現も、「だ、である」調のままにしている。)

2020年5月の白人警察官によるジョージ・フロイド氏殺害事件以来、黒人差別に抗議を行う「黒人の命は大切」(Black Lives Matter)の運動が激しさを増し、またそれに呼応するように、人種差別主義者の言説もかつてない程の大胆さを持って表出されている。このことは、アメリカ合衆国において、黒人差別がいかに根深いものであるかを示すものである。本書が、過酷な差別の中で生き抜いてきたアメリカ黒人に関する読者の皆さんの理解を深め、同時に、辺野古新基地建設問題に凝縮される、日本が沖縄に対して行ってきた差別についても考えて頂くことを、切に希望するものである。

入 会 者

氏名:西 あゆみ (にし あゆみ)

所属:一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程

自己紹介文:専門は英語圏文学で、ポストコロニアル批評およびフェミニスト批評に関心を持っています。現在は、1970年代から2000年代に出版された南アフリカ英語文学、特にJ. M. クッツェー、ナディン・ゴードイマ、ゾーイ・ウィカムの小説を、思想と形式の両面から考察した博士論文を執筆中です。学会員のみなさまとの交流のなかで、アフリカやアフリカン・ディアスポラの文学や思想を幅広く学んでいきたいと思えます。どうぞよろしく願います。

氏名:Raphaël Lambert

所属:Kansai University (関西大学)

自己紹介文:Raphaël Lambert lives in Kyoto and teaches African American literature and culture in the Department of American and British Cultural Studies at Kansai University in Osaka. He has published essays in *Journal of Modern Literature*, *Critique: Studies in Contemporary Fiction*, and *The African American Review*. His book, *Narrating the Slave Trade, Theorizing Community* (Brill) came out in January 2019. While on a Fellowship at the Rothermere American Institute at the University of Oxford (2019–2020), he started to work on a project that runs from the trope of slave agency in antebellum America to the radical rhetoric of Afro-pessimism in the 21st century.

氏名:Gregory Paul Glasgow

所属:Kanda University of International Studies (神田外語大学)

自己紹介文:Gregory Paul Glasgow (Ph.D.) is a New York City native and is an Associate Professor in the Department of English at Kanda University of International Studies. He holds a Ph.D. in Applied Linguistics from the University of Queensland in Australia. He takes an interdisciplinary approach to the study of the politics of Global Englishes in TESOL. Drawing on social theory and critical applied linguistics, he is interested in the interplay between structure, culture, and teacher agency in ELT policy and pedagogy, with special consideration of issues concerning race, multiculturalism, and diversity.

氏名:Natalia Doan

所属:University of Oxford (オックスフォード大学)

自己紹介文:Dr. Natalia Doan is the Okinaga Junior Research Fellow in Japanese Studies at Wadham College and the Nissan Institute of Japanese Studies, University of Oxford. Her research interests include nineteenth-century Japanese history and the transnational

production of resistance, culture, and solidarity. She teaches a graduate class on gender and sexuality in Japanese popular culture at Oxford, and has written about interracial encounters for *The Historical Journal*, the *Oxford Research Encyclopedia of Asian History*, and *The Journal of Social History*. As a biracial (Black/white) scholar of Japanese intellectual and cultural history, she is especially interested in interracial and crosscultural unities and connections in the pursuit of positive change. She looks forward to lively discussion and intellectual exchange with other members of the Japan Black Studies Association.

(順不同)

編集後記

本号の編集過程で、「繋がり」というキーワードが頭に浮かんだ。例会発表では興味深いことに柴崎氏の発表を皮切りに、作品同士の行き来(関連性)をみた福島氏、王氏、山本氏の発表が続いた。追立氏の新刊も黒人文学と沖縄文学に共通点を見いだし論じられている。いずれも大変興味深く、浅学な私にとっては大変勉強になるものばかりであった。また、萩原氏によるRita Keegan展(ロンドン)参加の報告は、新型コロナウイルス疫禍で見えにくくなった海外との連携・連帯について伝えてくれる。様々な場面における「繋がり」を意識することで自然と内から外へと目を向けさせられた。

今、世界では新たに目を覆いたくなるような暴力が振るわれている。この不穏な雰囲気にもまれて生じる負の連鎖を避けるべく、前向に「繋がり」を構築し、いかに維持できるかが問われているように思われる。

(猪熊 慶祐)

＜編集＞ 黒人研究学会・編集部
〒839-8502 福岡県久留米市御井町 1635
久留米大学文学部・神本秀爾研究室気付

＜編集者＞ 猪熊 慶祐
gr0313sp(a)ed.ritsume.ac.jp
ホーム・ページアドレス
<https://kmmstshuji.wixsite.com/jbsa>